

アジアの高等教育事情  
ダイナミック・アジア——最終回

グローバル時代に日本の大学がアジアの中で目指すこと

# 日本人と外国人が一緒に学ぶ場を作る

これまで10回にわたり、激動するアジア各国の高等教育事情を専門家にリレー形式で報告していただく企画「ダイナミック・アジア」を連載してきた。この座談会では、その最終回として、これまでの各国の動きを振り返りながら、改めてアジアで今何が起きているのか、そのなかで日本はどうしていくべきなのか、そして国境を越えて人材が移動する時代において、グローバル人材をどう育成するのか熱く議論いただいた。(編集長)

- 北村友人 上智大学 総合人間科学部 教育学科 准教授  
国際学術情報局国際交流センター センター長補佐
- 黒田一雄 早稲田大学 大学院アジア太平洋研究科 教授 留学センター所長
- 杉村美紀 上智大学 総合人間科学部 教育学科 准教授 (50音順)

## アジアの高等教育市場に何が起きているか 人、情報、教育プログラムがダイナミックに動く

北村 まず、3つのことが言えます。1つ目は人、情報、教育プログラムなどが国を超えてダイナミックに移動しているという最大の特徴です。2番目に、提供者の変化です。これまでは国立大学(パブリックセクター)が中心でしたが、今は私立大学(プライベートセクター)の存在感がいろいろな意味で高まっています。3番目が、高等教育で学ぶ人の数が増えて市場化が起き、質の問題が問われるようになった点です。国際水準を満たした教育プログラムが提供されているのが、マーケットや労働市場の側から見たときに、一番高い関心をもたれる部分です。一方で、国際プログラムが英語に偏る傾向もあります。

黒田 アジアでも、大学間協定、ジョイントディグリー、ダブルディグリー、ツイニング、サンドイッチといった国際プログラムがこの5~10年で雨後の竹の子のように増えています。国境を越えた教育プログラムのデリバリーというようにも起きている。

杉村 アジアの各国間のオートノミー(自立性)の対立も起きているですね。国際連携の動きが進むことで、各国の国策・国益と教育政策との絡みで、プログラムをどう位置づけるかで対立する。特に質保証のネットワークについては、結局各国の裁量に任せるという部分が大きく、実質的にはなかなか機能していません。

## アジアのダイナミックな動きの背景 「市場化」と「国際化」、それぞれの背景

黒田 アジアの高等教育を一言で言えば、「市場化」と「国際化」です。私立大学を中心とした市場化の背景には、高等教育に対するある種無批判な信頼による、経済合理性を超えたデマンドがあります。例えば韓国の高等教育就学率92%なんていうのは、どう見ても韓国の経済合理性のレベルを超えています。さらに、国立大学でも日本の独立行政法人化のような民営化が起っています。

北村 多くの人が高い教育を受けたいと願い、国立大学では不足私立大学がすごい勢いで新設されています。カンボジアでは、全大学数100校弱のうち、この10年間で増えた私立大学が50校以上を占めています。しかし多くの私立大学には、経営学、ICT、英語など、ビジネス系の専門学校的なプログラムしかありません。一方、国立大学は伝統的な学問分野のみを教えているので、国立大学の学生の中には、私立大学にも在籍し、実践的な部分を私立大学で補い、学位を2つ取るという日本のダブルスクールのような現象が起っています。統計が足りないのですが、教育省の見解では、少なくとも4分の1から半数の学生が、何らかの形で2つ以上の学位を取ろうとしています。ただ、2つも3つも学位を取っても必ずしも就職できないので、経済的合理性がない。バングラデシュでも同じようなことが起っています。

「アジアの学生は国境の壁をいとも簡単に飛び越えていく。日本の学生が一番やらないこと」

北村友人(きたむら・ゆうと)  
慶應義塾大学文学部教育学専攻卒業。カリフォルニア大学ロサンゼルス校にてM.A、Ph.D取得。国連教育科学文化機関(ユネスコ)、名古屋大学を経て現職。専門は比較教育学、教育社会学、国際教育開発論。



杉村 さらに補足すると、市場化の最大の要因は、やはり一般の人々の意識の変化だと思います。経済的な余裕や、中産層の著しい伸長がなければ、政策が人々の移動を促そうとしても動かない。かつてのようにエリート層だけが大学に行くのではなく、「学びたい」「資格を取ってより有利な就職をしたい」「より有利なキャリアを得たい」という意識が、アジアの人々にはあるのです。

黒田 次に国際化の背景では、アジアの政治、経済の動きが一体になるということがデファクト(de facto)として

進み、政治や文化、宗教、言語などの違う国々が、ASEAN共同体、東アジア共同体などに注目しました。そして、日中韓による東アジア共同体がスタートすれば、コンフリクトがありながらも機能的であろうと気づいた。そこで高等教育でも、アジアとして物事を考えられる人材を養成していく必要があると気づき、お互いに韓国語、中国語、タイ語、日本語を勉強するようになってきました。

北村 しかもアジアの学生は国境の壁をいとも簡単に飛び越え

### ダイナミック・アジア——これまでの連載

| 連載 | メインタイトル                                      |
|----|----------------------------------------------|
| 1  | グローバル化するアジアの大学——国境を越えた人材流動が求める質の保証           |
| 2  | 急激な量的拡大と質の維持・向上に向けた改革の進展(中国・前編)              |
| 3  | 改革開放30周年を迎えた中国の国際教育戦略(中国・後編)                 |
| 4  | 高等教育の国際発展におけるトランジット・ポイント(マレーシア)              |
| 5  | アジア太平洋地域を舞台にした国際教育の展開と質保証(オーストラリア)           |
| 6  | 世界の頂点を目指す自治大学化と米中を結ぶ新大学の誕生(シンガポール)           |
| 7  | ここで起きているのは「未来の姿」か——「情報公開」の推進で競争環境再編を図る韓国(韓国) |
| 8  | 高等教育のマス化とASEAN統合に向けた国際的地位の向上を目指して(タイ)        |
| 9  | 高等教育の一大市場を形成する底力、先を見据えた人材育成戦略(インドネシア)        |
| 10 | 知的資本の拡大と還流を目指す「知的資本大国」構想(インド)                |

ていくところが、ダイナミックな動きのゆえんです。例えばスリランカの学生が、オーストラリアのモナシュ大学マレーシアキャンパスで学び、次にモナシュ大学のオーストラリアキャンパスへと移動していく。日本の学生が一番やらないことです。

**杉村** 私は国際間移動の決定的な要因は、労働人材に関連していると考えます。スリランカの学生がオーストラリアに行くのは、オーストラリアでは留学生が学位を取った後にそこで就職できるからです。受け入れ国もそれを当然期待しています。

**黒田** シンガポールはナレッジ (knowledge) を集めることですよ。

**杉村** そうですね。しかしシンガポールはナレッジは集めますが、いわゆるブルーカラーは要らないという徹底した戦略をとっています。マレーシアはインドネシアの学生の労働市場ニーズを見込んで教育プログラムを作っています。

**北村** マレーシアでそれを可能にするのが、中等教育段階からの英語のトレーニングです。だから高等教育を英語のプログラムで受けられるのです。

### 日本にとって、今注目の国

### 大学の国際戦略を国策に位置づけるアジア各国

**北村** トップクラスの大学を目指すのか、そうでないか、大学が目指す目的により異なります。例えばワールドクラス・ユニバーシティを目指すなら、中国、シンガポールの2つを一番見なければいけない。

**黒田** マレーシアは、90年代の政策改革があそまで高等教育のあり方や社会との関係を変えたということを見ると、少なくとも参考にすべき国ですね。

**杉村** マレーシアには最初、中国人留学生が多かったのですが、2000年代にはいると、中国人は自国で英語教育を行えるようになった。そこで今度はイスラム圏のつながりを図ろうと、中東のドバイ、インドシナ半島ではホーチミン、南アフリカ、北京に事務所を作り、マレーシアに留学生を招致するようになったのです。特にアフ

リカ人学生はここ3~4年で急増しています。国策として行っているのですが、実際に受け入れているのは、もっぱら私立大学です。ではなぜアフリカ人がマレーシアに来るのかといえば、英語のプログラムが安価で受けられ、ディプロマを取ればイギリスやニュージーランドなどへ再留学することができる。いわば、トランジット・ポイントになるからです。そこにはマレーシアの社会や文化に対する愛着はあまり感じられません。

**黒田** 中継ぎ貿易みたいなものですね。

**杉村** ぴったりな言葉だと思います。これがマレーシアのトランスナショナル・プログラムなのです。

**北村** 自分たちの大学としてのアイデンティティを大事にしながら、なおかつ国際プログラムを作っていくと

いう日本のグローバル4大学(G4<sup>注</sup>)の動きは、タイと非常に似ていて参考になります。

**黒田** タイは英語圏でないのに、高等教育の国際化、英語化を進めています。一方でナショナル・エリートや、自国の言葉での高等教育もかなり大切にしている部分がありますので、確かに日

本と似ています。また、国立大学の中に私立部門を作り独立採算制にすることで、ビジネス・スクールなど国際水準のレベルの教育の授業料を高く設定しています。だから90年代後半の経済危機のときにも、高額の授業料にもかかわらず学生が集まった。高等教育のメニューを提供するという点についての柔軟性はすごいです。  
**北村** 韓国は英語化・アメリカ化を少し進めすぎてしまった気がします。例えば高麗大では3~4割弱の講義が英語で行われています。そのために海外で学位を取った人を教員として積極的に雇っているのですが、問題もあります。しばしば見られることですが、韓国をテーマに書いた論文で学位を取るのに、アメリカの大学の教員が本当に最先端のレベルなのかどうか判断できないままに学位を出してしまう。そういう人を英語ができるからといって雇ってしまうので、教育の質がどうも低いのではないかと、最近になって疑問視されています。さらに、韓国は小学校から英語教育に力を入れている割には、トップレベルの高麗大でも、英語の授業における

### アジアから日本はどう見えるか

### 質保証に高まる期待。ネットワークでイニシアチブを取る

**杉村** 国際的な質保証でいえば、日本は良い意味でも悪い意味でも慎重だと思います。

**黒田** 80年代ぐらいまでのアジアの高等教育研究は入試研究が強く、何をどう教えるかというところに大きな注意が払われていなかった。そういう意味で日本は90年代以降の高等教育改革の先例だとは確かに思います。特に理系では相当にアカウンタビリティの高い、生産性の高い教育が行われていたと思いますが、文系ではまだまだ難しい。

**北村** 本連載でもアジア太平洋でオーストラリアを取り上げましたが、オーストラリアが国際的な質保証を政策的に明確に打ち出して、もともと評価が高かったところをさらに裏づけている。日本は国際教育プログラムでオーストラリアとの連携をもっとやっていく余地があると思います。

**杉村** オーストラリアが主導して始まったアジア太平洋の質保証ネットワークに日本がもっと積極的に入っ

### 「アジア太平洋の質保証ネットワークに日本はもっと積極的に参加すべき」

杉村美紀(すぎむらみき)  
お茶の水女子大学文教育学部卒業、東京大学大学院にて教育学修士(博士)(教育学)を取得、外務省専門員、国立教育政策研究所研究協力者、広島大学客員研究員を経て現職。専門は比較教育学・国際教育学。



学生の理解度がかなり低い。そこも問題視されています。日本の大学もその方向に行きかけている部分があって怖いですよ。

注)国際教養大学、国際基督教大学、立命館アジア太平洋大学、早稲田大学国際教養学部。

ていくべきだと思います。

**黒田** 逆説的に、オーストラリアは市場化が進んだために質保証が必要になったと私は考えています。高等教育はオーストラリアの輸出産業の3番目ぐらいに入ります。日本でも質保証のことは90年代から言われてきましたが、有名な大学があぐらをかいていて、従来からの大学間の序列が強固に保たれており市場的な流動性が少ないので、質保証への強いデマンドがなかったのだと思います。しかし、最近多くのブレイクスルーが見られてきました。国際教養大学、立命館アジア太平洋大学が国際性を売りにして良い学生を集めている。会津大学もそうだと思います。

**杉村** オーストラリアのように、市場化に追随する質保証ではなく、日本は国際連携による質保証を行えばいいと思います。例えば日中韓のキャンパスアジア構想などのネットワークに参加し、日本の良い面をアピールできれば、海外の学生も日本の大学にアクセスしやすくな

東アジア諸国における高等教育の総就学率 (ISCED レベル 5A, 5B, 6) (1970-2005年)

|        | 1970年 | 1975年 | 1980年 | 1985年 | 1990年 | 1995年 | 2000年 | 2005年 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| カンボジア  | 1.4   | 0.8   | 0.1   | 0.3   | 0.6   | 1.3   | 2.1   | 3.6   |
| ラオス    | 0.2   | 0.3   | 0.4   | 0.8   | 1.2   | 2.0   | 2.8   | 7.9   |
| ベトナム   |       |       | 2.6   | 2.7   | 2.8   | 6.1   | 9.5   |       |
| インドネシア | 2.6   | 3.2   | 3.8   | 6.1   | 8.4   | 11.4  | 14.4  | 17.0  |
| 中国     | 0.1   | 0.6   | 1.1   | 2.1   | 3.0   | 5.3   | 7.7   | 19.6  |
| フィリピン  | 17.7  | 20.9  | 24.1  | 24.3  | 24.5  | 27.5  | 30.5  | 28.0  |
| マレーシア  |       |       | 4.1   | 5.7   | 7.3   | 16.6  | 25.9  | 28.6  |
| タイ     | 2.9   | 6.6   | 10.2  | 13.4  | 16.5  | 25.8  | 35.2  | 46.0  |
| 日本     | 17.6  | 24.1  | 30.6  | 29.8  | 29.1  | 38.2  | 47.4  | 55.3  |
| 韓国     | 7.4   | 9.9   | 12.4  | 24.9  | 37.3  | 57.9  | 78.4  | 91.0  |

出典：ユネスコ統計研究所データベース  
(http://stats.uis.unesco.org/unesco/TableViewer/document.aspx?ReportId=143&IF\_Language=eng)  
注：1970年、1975年、2005年のデータは一部入手不可能



黒田 一雄(くろた かずお) 早稲田大学政治経済学部卒業。スタンフォード大学にてM.A.、コーネル大学にてPh.D.取得。米国海外開発評議会、世界銀行、広島大学を経て現職。専門分野は発展途上国における教育政策、教育協力、高等教育国際化論。

「アジアとして解決すべき課題に、アジア人として目が向くような人材を育成する」

るのではないのでしょうか。

北村 本当にそう思います。そのときに、各国のさまざまなシステムが違うなかで、教育プログラム、研究面、施設など、共通の基準を定める必要があります。これは非常に困難かつ地道な作業なのですが、各国の代表としていくつか大学が集まり、ベンチマーキングを行うなどの方法が考えられます。文科省が国際化を支援する際には、こうした基準作りを支援してほしいと思います。

黒田 質保証に関して、単位互換の条約改正のための

ユネスコの会議が秋に東京で開催されます。日本が政策的にも関心をもって、アジアの中でイニシアチブを取ろうとしていることは良い方向だと思います。

杉村 その動きはアジアにとどまらず、ヨーロッパの国際大学協会 (IAU) など他地域の高等教育ネットワークなどにつながっていくと思います。だから日本の大学は、規模拡充や留学生の数を増やすというレベルの話ではなく、頭脳戦略の部分でリードすれば良いというのが私たち3人の共通意見です。先ほど黒田先生が、タイが日本の参考になるとおっしゃったもう一つの理由として、タイはASEANのコーディネート役を担っている点があります。

黒田 東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO), SEAMEOの高等教育研究所 (RIHED), ASEAN大学ネットワーク (AUN) などの事務所は、すべてバンコクにあります。ユネスコの地域事務局もバンコクです。国が政策的に取り組み、ある意味、アジアの教育首都的機能となっています。ただ、タイをはじめとする東南アジア諸国も北東アジアにパートナーを求めており、今は韓国がその相手役を担っています。しかし高等教育の質という点では、東南アジアはやはり日本を見ているところがあるので、日本がその役割を担ってほしいとも思います。

黒田 やっぱ日本の場合、出口よりも入口のスクリーニング・デバイスのイメージが強いですね。

杉村 国策の意図も要因としてあると思います。つまり中国が求める人材像と日本が求める人材像は違う。大学相互間の連携レベルは大学間相互の話し合いで進めることができるわけですが、国レベルの連携を考える場合にはまた異なる問題が生じます。ただ、これからはアジアの国々が自分の国のために人材を育てるという意識ではなくて、アジアの大学がアジアの人材を育てると考えなければいけないと思います。

北村 限られた分野からやってみるといいですね。例えば比較的連携しやすい理系の分野と同時に、哲学、文学、法学、経済などの分野でもアジア独自の地域性が出る領域に取り組んでみる。結局グローバル人材で一番求められることは、異なる文化や背景をもつ人たちが一緒に働くときに、いかに自分らしく力を発揮して共に働けるかといったことなので、必ずしも英語や中国語の国際プログラムである必要はないわけです。教育内容に最適なのであれば、それぞれの国の言語を使った国際プログラムもあり得ると思います。

黒田 日本人学生と留学生をまぜこぜで教育する場を作っていくことも教育的観点から重要ですよ。

北村 一番問題に感じるのは、留学生はたいてい留学生同士で固まっていることなのです。だから、教員側が腹を決めて、各ゼミに必ず外国人を2~3人入れるようにしてはどうでしょうか。たとえ日本語の授業であっ

ても、周囲の日本人が助けてあげることで、いろいろな学びが生まれると思います。大学院でも同じことが言えます。そういうなかからグローバル人材は生まれるのではないのでしょうか。事実、東南アジアのキャンパスには外国人学生があふれているので、彼らは皆外国人に慣れていますが、日本人学生たちが留学生たちを遠巻きに見ている日本のキャンパスとの差はここにあります。

黒田 私はグローバルCOEの枠組みで、アジア地域統合のための世界的な人材育成拠点の事務局長をやっています。グローバル人材育成と漠と行ってしまうと、欧米への留学が浮かびますが、ここでは、まずアジアの一員としてリージョナル人材の育成をできないかと考えています。ナショナル・アイデンティティはどうしても否定できませんが、アジアとしての一体化、アジアとして解決していかなければいけない課題に、「アジア人」として目が向くような人材を育成していくということが、日本の大学には非常に重要です。

さらにコミットメントも大切だと思います。東京大学の国際化戦略は「世界の公共性に奉仕する」です。エール大学も「グローバルな貢献」、スタンフォード大学も「研究によるグローバルな課題解決」とミッションに国際化をうたっています。なぜ国際化するのかを考え、世界的な貢献への潮流を意識することも重要です。

北村 私は一方で、すべての大学がグローバル人材を育成する必要はないと思っています。みんなが一斉に国際化の方向に流されるのではなく、経営陣の方には何よりもまず大学の理念をもう一度振り返っていただきたいと思っています。

杉村 これまでは、日本のなかだけで自己完結的にやってくることができましたし、労働市場も需供バランスがとれて高度経済成長も達成しました。しかしこれからはそういう時代ではない。多層的な人材移動のなかに日本と自分を位置づけ、異文化の人と交流をするなかで、いかに複眼的、多層的な視点で物事を考えられるか。私たち次世代の人材を育てる大学側も考えるべきだと思います。

本連載企画の監修にご協力を賜りました桜美林大学馬越徹先生が本年4月にご逝去されました。馬越先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



真のグローバル人材とは  
異なる文化や背景をもつ人たちが一緒に働くときに、いかに自分らしく力を発揮できるか

黒田 OECDにおいて、中等教育の質を測るPISAのように、今度は高等教育の質を測ろうというAHELOの動きが起こっています。ミニマム・スタンダードならそれでいいですが、もっとハイレベルのスタンダードという点では、出口のアセスメントなどで質を見ていくべきでしょう。理系のJABEEのように、横断的な専門分野別の質ということも当然あると思いますし、もう少し大きな枠組みでは、自己評価も含めた形でのア krediteーションで質をチェックしていく方法があります。

杉村 北村先生が去年まとめられたグローバル人材の研究によると、結局何をグローバル人材と呼んで、どういう人材像を求めるかを決めないと、質が決まらないことがわかりました。グローバル人材は英語が話せれば

いいのかということになってしまうと、非常に狭い意味になるので、そこを議論する必要があります。

北村 学位の共通性、例えば日本と韓国と中国とマレーシアといった異なる国で学んで取得した学位をどう扱うか考えたとき、学問分野別に考えるべきです。理系、ビジネス系など、世界中で基本的に同じような内容を学ぶスタンダードが確立している分野と、教育学など国内の大学間ですら教育内容に違いが見られる分野では、扱いを変えるべきです。

杉村 人材育成という意味では、企業とのつながりを考慮することも重要だと考えます。大学の側から歩み寄って、企業がどういう人材を求めているかといったことを、今まで聞くこともなかったように思います。